

■2009年7月13～17日 北海道紀行(2) シマフクロウと釧路湿原ガイド・ツアー

蛭川 隆夫(昭和39年卒)

***** 2009年8月17日投稿

風雨にたたられた大雪連峰の前半戦を終え、湿りきった荷物を乾かすいとまもなく後半戦に移行。シマフクロウとの出会いを求めての旅だ。それに釧路湿原自然観察ツアーと道東の山登りを加えた。シマフクロウは、天然記念物であり、また絶滅危惧種。アイヌ語でコタンコルカムイ（村を守る神）とよばれる。この言葉が示すように、アイヌ民族の居住場所とシマフクロウの生息場所とは重なり合っていたらしい。サケなどの川魚を捕るのに好都合な、川岸の平坦な台地に広がるミズナラの林とともに住んでいたのだ。

●7/13（月） 雨

前半戦でお世話になった藤田さんの見送りを受けて、佐藤 恭(S31)、蛭川隆夫(S39)、竹中 彰(S39)は、レンタカーで旭川を後にした。今日の目的地は、シマフクロウの宿である養老牛温泉。

途中の美幌市内で、旅のお友として「北の勝」一升瓶を購入。小野さん(S40)ご愛飲の根室の地酒で、蔵元は100年の歴史を誇るらしい。

またもや雨模様。計画していた藻琴山(1,000m)はとりやめ、弟子屈経由で養老牛温泉に直行することにした。濃霧の美幌峠を越えるときは、大きな雨粒が強くボディを叩いた。明日泊まる西別小屋へのアプローチを下見してから、予約した「湯宿だいいち」にチェックイン。佐藤さんの話では、シマフクロウ目当ての「日本野鳥の会」会員に人気の宿だ。フクロウ大好き人間の私には、シマフクロウは長年にわたり憧れの的だ。いよいよ今晚ご対面かと期待に胸をふくらませつつ宿帳に記帳した。ロビーでウエルカム・ドリンクを飲みながら仲居さんと話していたら、6/23の集中豪雨で川岸の生け簀(餌場)が土砂に埋まってしまう、それ以来、憧れのお方はほとんど姿を見せないという。佐藤、竹中両名は冷静な顔をしていたが、私は思わず「えっ!!」と大声をあげてしまった。そうしたら「キャンセル料はゼロで結構ですから、近くの「旅館藤や」にかかりますか」と言ってくれた。よほど私が落胆した表情を見せたからだろうか。ここまで来たからには料金アップを厭わず宿替えしようと衆議一決。

「旅館藤や」は、川面よりも高い裏庭に生け簀があり、それで豪雨の被害を免れたらしい。そもそもは、7年前に泊まり客が親子で遊べるようにと池を作り、そこに魚を放したものだという。ところが、池はシマフクロウの餌場と化した。それを聞きつけた環境省スタッフがすぐに駆けつけてきて、シマフクロウの足にカラー・リングを付け、そして「動物園化させないように」と指導した。それで、宿としては餌の養殖ヤマメ(本州のヤマメ)の投入は一回に50匹に抑え、それがなくなるまで補充しないなど注意しているとのことだ(1週間から10日で食べ尽くされ、5～6万円/月の出費らしい)。

生け簀を真ん前に見る1階の部屋で、夕食まで佐藤さんから野鳥に関する講義をいただいた。日本には11種（最近の学説では12種）のフクロウがいること、そのうち純白のシロフクロウは北極圏から渡ってくるが日本では繁殖していないこと、シマフクロウは日本最大のフクロウであること、フクロウ類は頸を270度回転させられることなどなど（帰宅して『シマフクロウ』という観察記録集を読んだら、さらに頭部を150度回転させられる、しかし眼球は動かせないと記されていた）。そのうち旅館の主人が庭に出てきて、生け簀のネットを外し、丁寧にたたんだ。

夕食時、旅館の横の電柱に留まっていると仲居さんが教えてくれたので、食事を中断して外に出た。見上げると、つがいと1羽の幼鳥。このようにまずは電柱にしばらく留まり、次に屋根に移ってそこでもしばし滞在して、それからやっと生け簀に飛び移るのだそうだ。捕食動物（キツネなど）を警戒しての習性だろうという。佐藤さんによると、アメリカではこういうときバード・ウオッチャーは「lifer」と言うそうだ。「生涯を通じて初めて見た鳥」という意味らしい。シマフクロウは、佐藤さんにとって日本の野鳥で253番目のライフアークとなった。

夕食後、部屋に戻り、講義の続きを伺いながら、じっと生け簀の方をうかがった。午後8時頃、庭園灯が一つだけ点された薄暗い中、窓ガラスを左斜め上から右下にかけて横切る一つの影。生け簀の囲いに、こちらを向いて（あるいは頸を回転させて？）留まったのは、まさしくシマフクロウ！図鑑では灰褐色とあるが、全体に白っぽい感じだ。例によってしばしあたりを警戒してから生け簀に入り、あきらかに魚を捕まえた。このときちょうど双眼鏡を構えていた竹中さんの観察では、「ついでむというより、丸呑みする感じだった」そうだ。間近に憧れのお方を拝むことができた安心感からか、急激に眠気が襲い、不覚にも一時眠り込んでしまった。結局この夜は、生け簀にやってきたのはこの1羽だけだったそうだ。あとの2羽は、どこで魚を捕まえたのだろうか。近くの川の天然ヤマベが豊漁のときは生け簀飛来回数が減るとも女将が言っていたので、あるいはこの夜は川で漁をしたのかもしれない。

「藤や」は、『釣りバカ日誌』第22作のロケ地。この人気のシリーズは、川釣りをテーマにした同作をもって完結となる（12/26全国ロードショー）。

●7/14（火）曇りときどき晴れ、のち雨

チェックアウト時に、旅館の主人とシマフクロウ談義。「最近、近くにエゾライチョウがよく出てくる」との話もあった。シマフクロウのグッズと絵はがきを記念に買って、標津岳（1,061m）に向けて車を出した。

「藤や」の裏手にあたる林道を走っていると、1羽の茶色っぽい鳥が飛び立って、ほんの一瞬で樹林の中に消えた。ブレーキを踏んで行方を目で追ったが、佐藤さんは双眼鏡を構える余裕がなかった。後刻、佐藤さんは「尾の形からしてエゾライチョウの可能性が高

い」と言った。そうであれば、宿の主人の証言もあることだし、ライファーとしてカウントしてもよさそうだが、きちんと確認できなかったのもうはしないのだと言う。ゴルフと同じで良心に従って申告するのだそうだ。もっとも「棺桶に入るときは、やはりあれはエゾライチョウでしたと神様に認めてもらう」との発言もあった。ちなみに本州のライチョウと違い、冬になっても白くならないそうだ。

林道を6kmほど走ると、立派なトイレのある登山口（駐車場）に着いた。身ごしらえして9:30に登り始めた。各合目に標識が付されている。それをそれぞれ15~20分で通過して、5合目で小休止（10:55~11:03）。さすがは北海道の山で、1,000メートルに満たない8合目あたりからハイマツが現れた。そのトンネルを漕いで、12:44に頂上に到着。阿寒岳、知床連峰、斜里岳、根釧原野の眺望を期待していたが、あいにくのガス。それに風があつて寒いので、早々に下山とした（12:52）。8合目で昼食（13:23~14:10）。この頃からガスが切れ始めた。ジグザグの下り斜面にダケカンバの見事な純林が続く。林床のチシマザサ（ネマガリダケ）とダケカンバの樹肌とに、曇り空を通して柔らかい午後の日差しが当たり、それは美しかった。

長い下りにうんざりした頃、登山口に帰着（16:00）。昨夕下見しておいた西別小屋に入った。太い丸太を使ったログハウス風の2階建て。大きな薪ストーブが中央に据えられていて、薪も豊富に用意されている。寝具や炊事用具もかなり備え付けられている。水は持ち込まなければならない。相客はおらず、広い室内を占領して「北の勝」を飲み、夕食を取った。本州にもこのような無料小屋があったらいいなと思った。

●7/15（水）雨

起きると、しっかりと雨が降っている。西別岳（800m）から摩周岳（857m）を往復する計画だったが断念し、標津町の「標津サーモン科学館」に転進した。知らなかったが、サケ科>サケ亜科>イワナ属という系統で、イワナ（charr）もサケの仲間だと展示されていた。その一つ、ホッキョクイワナ（arctic charr）はとても美味らしい（アラスカで賞味したことのある佐藤さんの言葉）。佐藤博物学者は、鳥、花、木に加えて魚も勉強中らしい。

この日の宿は、標茶町の民宿「木理」。隣のコンビニで「北の勝」を補充。佐藤さんが道々観察した白い花の木の名前を知りたがっていたが、同宿の林業関係の若者一行がハシドイ（ライラックの仲間）だと教えてくれた。

●7/16（木）曇りときどき晴れ

釧路湿原のプライベート・ツアー。探鳥を主眼としたので、朝早く5:00に「塘路ネイチャーセンター」に乗りつけた。出発前の打ち合わせで、佐藤さんが要望を出した。「無理を承知でお願いするが、エゾフクロウ、エゾライチョウ、オジロワシ、クマガラ、タンチョウ、それに魚のイトウを見たい」。若い男性ガイドは、「このお客さんは、ただ散歩するだけの観光客とは違うな」と見たのか、やや緊張した表情を浮かべた。このガイド、野鳥だ

けでなく、草花、樹木、アイヌ語、考古学など何でも答えてくれた。

まず向かったのは、湿原東側のシラルトロ木道。駐車場から、「蝶の森」を経て終点まで約30分のウォークである。途中で、湿原特有の景観である谷地坊主や谷地眼が見られた。終点には、展望台や野鳥観察台。眼前に湿原が広がり、そこを飛び回るノゴマを観察した。興ざめは、湿原を切り裂くJR釧路本線の線路。昭和の初めに他所から土を運んで土盛りしたらしい。今ならとてもそんな「自然破壊」は許されないだろうと思った。

後半は、これまた土盛りの横断道路を西に走り、さらに南下して、温根内に向かった（その途中で塘路湖沿いに林道を分け入り、湖岸の樹枝に留まり魚を狙っているオジロワシを遠望した）。そのドライブに小1時間かかった。「釧路湿原は開発で面積が昔の60%になった。それでも、縮小後の面積が日本全体の湿原の60%を占める」とのガイドの説明があったが、尾瀬がとても及ばない釧路湿原の広大さを車に揺られながら実感した。温根内の湿原には、環境省が巨費を投じた、長い木道が整備されている。木道敷設のこれまでのノウハウや経験をすべて盛り込んだ、最高品質の木道だとガイドが説明した。

最初は、低層湿原を歩いてザゼンソウやヒメカイユの花を観察した。鳥では、ベニマシコ。佐藤さんには、No. 254のライファー。日本の野鳥は約540種なので、佐藤さんはその半分近くを見たことになる。佐藤さんがバードウォッチングを始めたのはアメリカ駐在時代とのこと。アメリカでの体験などをHUHACに投稿頂きたいものだ。高層湿原でツルコケモモ、ガンコウラン、ハスカップ、トキソウなどを観察して、6時間のツアーも終わりに近づいた頃だ。我々を祝福するかのように、ついにタンチョウのお出まし！アシヤスゲに下半身を隠し、こちらを警戒しながら少しずつ離れていった。

午後、釧路市内に移動し、民宿「木理」の主人お勧めの「ふくろう倶楽部喫茶ローゼ」を訪ねて昼食。店内には、フクロウのグッズや図書があふれている。経営者の渡邊松子さんは、エゾフクロウを撮り続けているアマチュア・カメラマン。佐藤さんを日本野鳥の会会員だと紹介すると、「自分はフクロウには過度に接近せず、驚かせないように注意して撮影している」としきりに言い訳する一幕もあった。

夜は、ガイドご推薦のお店「炉ばた」で山海の珍味を着にして今回の北海道紀行を振り返る予定だったが、暖簾をくぐったのが5時ちょっと過ぎなのに、すでに満員。炉端焼きなるものの発祥の店だけに、観光客が押しかけるのかもしれない。

●7/17（金）曇りときどき晴れ

TVも新聞もトムラウシでの大量遭難で持ちきりだった。釧路空港に向かいながら、自分ももしかしたら危なかったかと、今回の装備不良をあらためて反省した。

機内に持ち込んだ「サッポロクラシック」350ml1缶では足りず、羽田空港で蕎麦をつまみに反省会をして今夏の北海道の旅を終えた。